人生 苦あり 笑いあり

秋保喜美子
あきやす　きみこ／1949年生まれ。結婚、出産、子育て、作業所の立ち上げにも参加。障害者自立支援法違憲訴訟元原告。著書に『ふたりのエース　障害のある人と65歳の誕生日』（浅田達雄氏と共著・きょうされん発行）

第1回　亡き母に感謝

母が亡くなって敬老の日を気にすることが薄らいでいた私ですが、今年は町内会から商品券と小学校の生徒さんから長寿祝いのお手紙を頂き、自分の年齢を改めて実感させられました。母は98歳で天国に旅立ちました。

母の人生は私の存在で苦労だらけでしたが、苦労に沈み込むことなく、その時折々のなかで楽しみをつくるのが上手な人でした。一人座りもできない娘を背負って母子通園に通った幼児期、リハビリでつらい思いをしている私にかまわず、同じ境遇の親子、そして先生方との会話に花を咲かせ、「あー、今日も楽しかったねー！」で毎日が過ぎていきました。

小学校生活は母親と共に

６歳になるので、その施設に入園希望をしましたが、受け入れてもらえず「地域の小学校に通わせなさい！」と難題を投げつけられました。当時は、重度障害児への教育は「就学猶予又は免除」が当然の時代で、学校の受け入れはなかなか許可が下りないなか、「親がずっとついているのならきてもいい！」と校長先生が言われたので、１年の２学期から母親監視付きの学校生活を６年間過ごしました。学校でも母はみんなに好かれ、「キミコの代わりにネ！」と言ってよくあそびの仲間入りをしていました。

お説教の思い出も

そんななごやかさが一転することが時々ありました。それは天気の良い日に起きます。私のテストの点がよくなかったり、宿題をさぼったりすると、学校帰りの山道でおぶっていた私をおろして、「何のために学校に連れて行っとると思うとるんね！」と、お説教が始まります。さらに締めくくりは「もう、こっから一人で帰りんさい！」と言って立たせるとサッサと離れて行ってしまうのです。泣きながらヨタヨタ２メートルぐらい歩くと転び、ワアーワァー泣き叫んでいると舞い戻ってきた母は、またおぶって急ぎ足で帰り、おやつと宿題を言い渡して、父が待っている農作業の手伝いに駆けつける毎日でした。雨の日も雪の日も、背丈が同じくらいになっても通ってくれて、無事に小学校を卒業できました。

どんなときも尽くしてくれた母

母の監視付きの小学校時代、よく怒られた私ですが、中学生時代から家族から離れて自分の思いのままに突っ走ってきた私。結婚、出産と、大きな山場がありましたが、母はいつも私たち家族の支援に生涯をかけて尽くしてくれました。母のおかげで歩むことができた、感謝！　感謝！　のわが人生です。